

当たり前の社会生活を再発で断念 ——ハンセン病療養所「菊池恵楓園」聞き取り——

福岡安則*・黒坂愛衣**

本稿は、1943年に熊本県の旧家に生まれ、母親がハンセン病を罹患したため、4歳のときに生き別れ、自身もハンセン病を発症し、小学校2年生で菊池恵楓園に入所した男性のライフストーリーをまとめたものである。

語り手の太田明さん(園名)は、長島愛生園につくられた全国の入所者のための昼間定時制高校、新良田教室を卒業した時点で、社会復帰。大学を卒業し、会社員として仕事も覚え、同じく恵楓園を退所した女性との結婚を考えていた矢先、再発。恵楓園に再入所。すでにリファンピンという特効薬もできていて、半年ほどで社会復帰できると考えていたが、治療の副作用が出てしまい、回復までに時間を要した。結婚相手の女性も、彼女の母親が入所者で、その看病もあって、恵楓園に再入所。その体験を「ハンセン病になった人は、当たり前で生活するのが、破壊される」と語る。また、家族、親族とのつながりも希薄化されてしまった体験を、非当事者であるわれわれにも理解可能なかたちで語ってくれている。

聞き取りは、2011年3月18日、菊池恵楓園内の語り手の寮舎でおこなった。聞き取り時点で、67歳。聞き手は、福岡安則、黒坂愛衣、足立香織(当時、埼玉大学教養学部2年)。

太田明さんの語りは、5期生として体験した新良田教室の人間関係も詳細に語られ、貴重な証言となっている。さらに、再入所して以降、恵楓園入所者自治会の役員として、もしくは全患協(のち、全療協)の中央執行委員等として体験してきた、1996年の「らい予防法」の廃止、2001年判決のハンセン病違憲国賠訴訟の経緯、2003年に熊本県内で起きた療養所入所者に対する宿泊拒否事件の一部始終、2004年に恵楓園で開かれた検証会議への資料提供といった、ハンセン病問題の歴史を語る上で欠かせない諸事件の現場に立ち会った者としての証言のどれもが、貴重である。

また、将来構想案として彼が語った、全国13の国立ハンセン病療養所の再編成を、患者運動しての全療協の発言力が強いうちに、自分たちのほうから立案して進めることの提唱は、きわめて現実主義的な発想に裏打ちされているようにも思われた。

本稿は、2022年10月時点で語り手ご本人にお送りし、必要な補正を施していただいたものである。なお、語り手は現在、菊池恵楓園自治会副会長をつとめておられる。

キーワード：ハンセン病、隔離政策、らい予防法、ライフストーリー

* ふくおか・やすのり、埼玉大学名誉教授、社会学、yfukuoka196869@gmail.com

** くろさか・あい、東北学院大学教授、社会学、kurosaka@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

本稿はJSPS科研費19K02126の助成を受けた研究成果の一部である。

4歳で母と別離、小2で入所

私は〔生まれは〕昭和18年、熊本〔県内〕です。母方も、父方も、旧家でした。使用人だけで10人ぐらいおりました。馬小屋はあるし、米倉がいっぱいありました。味噌倉もありました。悪いことすると、倉の中に閉じ込められましたね。農地解放で、田んぼはぜんぶ徴収されましたが、山林は没収されなかった。

母が〔この〕病気だったんですよ。私は、4歳のときに母と別れてるんですわ。離縁させられたわけです。母は〔その時点では療養所に〕入ってないんです。母〔の家〕がまた素封家ですね、プロミンを薬品会社から買って、自宅療養したんですよ。で、母が療養所に入ったのは、昭和31年。私のほうが先に入ったんですよ。

私は〔幼児のときの、母親の〕記憶全然ない。小学校1年生の入学式からは鮮明に覚えてるんですよ。入学式で「ハイ」って立ってね。冬は、夜、「火の用心」というのをするんですよ。そしたら、鉛筆1本とかノートをもらえた。そういうのを鮮明に覚えてますけどね。〔小学校入学前の〕記憶はない。

〔小学校1年のときは〕すごい元気で、あちこち、水泳とか、三角ベースの野球しに行きよったですね。家へ帰っても、母親がいないでしょ。だから、学校終わって、まともにスーと家に帰ったことないんです。友達の家へ〔寄って〕、お茶飲んで、晩飯頃に帰る。それを繰り返してました。やっぱり、さみしかったんでしょうね。妙に、よその家庭に憧れてましたね。

〔うちには〕おばあちゃんがいたですね。でも、祖母は、元は学校の裁縫の先生でした。いまでいえば家庭科の先生。厳格な人でした。

父親は、旧制高校を出て、京都帝大を出て、銀行マンになって。母とは、昭和18年の1月に熊本市内の料亭を借り切って披露宴をやったんですよ。その後、三菱重工業に移って、戦争中は上海に行っていました。

だから、父は、戦争と、農地解放、そして、妻の病気、子どもの病気。いやあ、父も、思えば、大変だったなあ。

父は戦地から帰ってきた後は、会社には戻らなかった。家を継ぐ、と。地元の、高校の先生になりました。"おれは教頭も校長もやらん。異動もいっさいしないなら、学校の教師になってもいい"って、教育委員会に行って自分で話をつけてきて、ずうっと21年間、高校の教師をしました。最後は、地元の町長選挙に出て、町長になった。65歳で、町長現職のまま急死しました。

私は、小学校2年生でこの療養所に来ました。そのときからずうっと、小学校も中学校も高校も、ぜんぶ、療養所のなかの分校での教育ですね。

私は〔左の股のところ〕ほんの、丸い白い斑紋がでた。祖母と一緒に風呂へ入ったんですよ。そのとき、祖母が気づいた。ひよっとすると、母の病気がでたんじゃないかと。ちょっと診てもらおうということで、転々と〔医者〕に診てもらって。最終的には、大学病院のお医者さんに菊池恵楓園（ここ）に行ったほうがいと勧められた。

〔ここへは〕おばあさんと父と二人〔が付いてきてくれた〕。園長は宮崎〔松記〕先生。その人が同じ京都大学出なんですよ。「これは、いまはすぐ治るから、このまま、私に任せろ」と。父と祖母は、その日、帰っちゃって。私はもう、そのまま〔ここに入所〕。

昭和26年に〔恵楓園は〕一千床拡張の工事が完成して、2,100床になった。

そのとき熊日新聞に大きく載ったんですよ。「白亜の殿堂，完成」「社会の救済センター」と。父は新聞をよく読んでたから、「お，これは，恵楓園が大きくなった、って。

〔話を戻すと，入所ときは〕自宅から熊本市内まで国鉄で行って，〔駅からは〕バスで来たと思う。電車だったかも。そのときは，ただ斑紋があるだけでしたね。どうもなかったですね。

新発患者は宮崎先生が診よったです。菌検査で，あっちこっち，メスで5カ所ぐらい取られましたね。〔先生は〕「ああ，これはすぐ治る」って。私，いちばん嬉しかったのは，「ここも学校があるから」って。この園内に学校があるということがうれしくて。学校へ行けるんなら，どこでもおんなしことやと，そのときは思ったんですね。

〔当時，「解剖承諾書」は〕ありました。拇印です。〔署名は〕本名ですね。自治会の資料室に〔保存されてる〕私の小学校2年生のときの学籍簿は，本名で書いてあって，その本名を線で消して，その下に「太田明」と書いてあります。〔でも，まもなく〕医事係の人に「名前，変えたほうがいい。君は家も近いし」と言われましたね。私は他人（ひと）に〔自分の名前を〕付けてもらうのが，ものすごい嫌で。いまから自分で名前を付けにやいかん思うて，一生懸命，新聞を見てですね，〔自分でわかる〕漢字を〔拾って〕自分で付けたんですよ。「これで，どうでしょうか？」「これでけっこうです」と。

とにかく〔ここに〕入ってびっくりしたの，見るもの，人間も景色も，真っ黒なんですよ。もう，黒のイメージでしたね。ひじょうに暗い。子どもながらに思いました。ちょっと社会と違うと。いま，よく考えてみれば，じっさい，板塀なんか，ぜんぶ黒く塗ってありました。まだ戦後だったもんだから。とにかく，暗いところへ来たなと思いましたがね。

〔園を取り囲むコンクリート塀には〕やっぱり，ものすごい圧力を感じたですね。もう，ここから出られないんだな，と。私，野球が好きだったもんだから，塀をめがけて，毎日，キャッチボールしてました。最後，穴を開けたですね。〔いま，資料館にある，穴のあいたコンクリート塀は〕西側のやつです。北側に，私たちがあけた穴があります。暴投を投げたりするんで，それを拾（ひら）い行くために作った穴です。いまでも，その穴，残ってます。

一時収容所から少年舎へ

〔収容所にいたのは〕1週間か2週間だったと思いますね。それから少年舎に入った。いまの合志寮の9号〔のところにありました〕。いちばん北側。新しくできたばかりでした。

〔それ以前は，少年少女舎は塀の外にありました。〕三井財閥が，十坪住宅を寄贈したんですよ。患者さんを収容せにやいかんでしょ。土地はあるけど，国の予算がないもんだから，建築費は，財閥か熊本県内の篤志家からお金を集めたんです。なんと，その篤志家のなかに，母のお父さんの名前があって，〔それを見たときは〕びっくりしました。新しい少年舎，少女舎ができたのが，昭和26年。できたばかりの新しい家でした。昔の少年少女舎は，新発患者が入る一時収容所になってましたね。

〔私が入ってきたとき，少年舎には〕35人ぐらいいました。〔少女舎のほうも〕35人ぐらい。〔男女合わせて〕70～80人おりました。同級生だけで12名

おるわけですから、すごいでしょ。[そのうち] 女の人が4人かな。12人のうち、もう、6人亡くなったです。

[少年舎の暮らしは] 12畳に4人ですわ。集団[生活]で、掃除に明け、掃除に暮れたですね。朝は5時に起きて、まずお湯を沸かすんですわ。お茶を飲むのと、食器を最後、洗うやつ。ぜんぶ、自分らでしなくちゃならない。そして、盥(たらい)に水とお湯[を入れて]。冬はもう、冷たくてね。手で雑巾を絞って、廊下[の拭き掃除]。自分の下着もぜんぶ自分で洗濯せないかんでしょ。とにかく、掃除してましたね。学校へ行っても、教室、自分らで掃除せないかんでしょ。

[治療ですか?] 昭和24年から[特効薬]プロミンもありましたしね。もう、プロミンで治ってた頃ですね。ただ、[昭和]28年までは、大風子油が半分、プロミンが半分でしたよ。まだ、プロミンを信用せん人がおった。[旧事務]本館に行って資料をみたらね、プロミン注射を打つ人の名前、大風子を打つ人の名前、半々でしたね。まだ、「大風子のほうがええ」という人もおったみたいですよ。でも、昭和28年が最後でした、大風子は。

わたしは、プロミンだけですわ。3cc、毎日、注射を打つ。効いたですわね。ものすごく、からだが軽くなるんですよ。[それまでは] だるかったです。この病気が、ものすごく、だるくなるんですよ。足が、鉛を付けたように、ものすごく重い。とくにL型、結節らいはですわ。とにかく、からだのだるくて、すぐ疲れちゃう。足が重くなる。

私[治療を受けてからは] 元気よくてね、サッカーしたり、野球したりしてましたね。それと、チャンバラ。あの頃、[月に]500円ぐらい自用費をもらえたんかな。その500円を貯めて、自転車を買いました。私は人よりも元気だったから、中学になると、こんな狭い療養所におられるかいうて、休みには、熊本市内まで12キロ、自転車でタタタッって、映画を観に行っていました。3人か4人連れて、「おい、行くぞ。今日は『OK牧場の決闘』がかかっているぞ」とかね。当時の映画館ちゅうのは2本立てなんですよ。グレゴリー・ペック[主演]の「白鯨」とかね、あんなの観てましたね。

[当時はまだ、巡視が] うるさかったです。私は、しょっちゅう捕まってきました。でも、ほら、後遺症がなかったもんだから、わりと大目に見られてましたね。後遺症のきつい人には、やっぱり、厳しかった。

[父は]1年に2回は[面会に]来てましたか。祖父のほうがよお来てました。それは、あとになって意味がわかったんですよ。親父の結婚相手を見つけてきたのが、じいちゃんだったんですよ。じいちゃんが、やっぱり、責任を感じたんでしょうね。母のとき、7人きょうだいで、母だけが病気なんですわ。私を産んでから発病したと、母は言っていました。だいたい女の人は、発病するのはお産した後らしいですわ。からだが衰弱するからですわ。

[祖父が面会に来るときは]いつも、なんか土産は買うてきたみたい。3人おった巡視に、必ずやりましたね。[それもあつて]私は捕まっても大丈夫だったんですよ。私は捕まっても、「ああ、君か」と、いつもお目こぼしされてた。

私がいちばん感激したのが一つある。戦前、祖父は村長をしてたんですよ。私がここに入ってきて1ヵ月ぐらいして、村民の人たちが10人ぐらい学校に来た。背広姿の人がずらあつと並んで、私に見舞いに来とるわけ。「ぼっちゃ

ん、大変だった。ご苦労さん」「しっかり養生して、社会へ復帰してください」。私は、これは下手なことはできんぞと、子どもながらも思いましたよ。自分は誰かに見られてるんだなあという実感。これは、まともに生きなきゃいかんなど。ものすごい感激したっちゃうか、嬉しかったですね。

〔実家に帰省したのは〕高校へ行ってからですよ。〔それまで〕1回も帰ったことない。けっきょく、わかるんですよ。面会に来た父やら祖父の様子をみて。「帰ってくるな」とは言いませんけど、「帰ってこい」とも言いません。わかるんです、雰囲気です。帰ったらまずいんだなあ。

私がここに入った4年後に、母が入ってくる。これは、ショックでした。涙が止まらなかったですね。実の母が恵楓園に入ってくるわけですから。

〔だけど、会っても〕これが母だちゅうことが、わからんわけですよ。4歳のとき別れとるから。一緒に飯を食った記憶もないしね。母の顔なんてわからんし。むこうも、13歳になった息子〔の顔を見ても〕わからんわけですから。

母の母、祖母が来ました。それと、母の姉さんが来ました。「あんたのお母さんが、今度、ここに入ることになった」って。だから、直接、母とおれと二人での親子の対面ちゅうのはないんですよ。会いましたけど、涙の対面とかなんとかはないんですよ。

私は昭和34年〔の春〕に長島に行くわけですから、3年間はここに〔母と一緒に〕おったんですね。でも、道ですれ違っても、声をかけられないんですよ。この人が、ほんと、自分のお母さんだちゅう実感(あれ)がないんですよ、全然。むこうはあったでしょうけどね。母はもう、目が不自由になってましたね。まだ少し見えてましたけど、4、5年したら全盲になったんですね。いや、なんとも言えん体験(あれ)でしたねえ。

母は、いまも、91歳で生きてます。だから、デパートから美味しい食べ物を月に2回ぐらい、持っていきますよ。親孝行できるのは〔それぐらいしかないから〕。

長島愛生園の新良田教室へ進学

私は、中学校のとき、大学へ行って、できたら朝日新聞に入って、政治部記者になりたいと、ずうっと思ってましたね。〔だから、高校は〕熊本〔県立〕済々黉高校(せいせいこう)へ行くつもりだったんですよ。済々黉へ行って、東京六大学に行くぞ、神宮で野球したいなというのが夢でした。しかし、親父が反対。「まだ〔社会に出るのは〕ダメだ」と。「岡山〔の長島に療養所内〕の高校できたから、まだ4年間、長島に行きなさい」。それでアタマに来て、「熊本の高校ではダメなら、福岡でもどこでもいいから、ほかの高校へ行きたい」と言ったんです。で、園内の担任の、患者さんの先生に、「もう病気は治ったから、外の高校に行けるように、父を説得する手紙を書いてくれ」と頼んだ。それも効き目なくてね。もう、しょうがない、長島愛生園〔の新良田教室〕に行った。

新良田教室は、5期生ですね。昭和34年〔入学〕。〔恵楓園から〕12、3人受けて、3人通りました。1人は女の人。

〔岡山の長島までは〕御召列車で行きました、熊本駅から。そのとき、鹿児島島の〔星塚敬愛園の〕連中と一緒にね。鹿児島島の連中、私たちがあんまり都会的に見えて、びっくりしたらしいですよ。時間はすごくかかりましたよねえ。

御召列車は、とにかく、しょっちゅう切り離される。郵便貨物列車ですから。いっさい外に出ることなくて。まあ、受刑者が刑務所に連れて行かれるような心境でしたね。とつてもさみしかったですね。高校入学の喜びちゅうの、全然ないんですよ。で、虫明に着いたら、真っ暗な闇のなかをですね、夜の11時頃ですよ、ポンポン船に乗せられて。海を見ると夜光虫がいっぱい。いよいよ、おれも島流しか。いやあ、ほんと、夢も希望もなくなりました。〔ところが〕また、よおしたものですよ。入ったら、そこに野球部があった。ヨーシ、やってやろうじゃないかちゅうことで、野球をやったんですよ。勉強もしましたけど、野球も一生懸命でやって。けっこう仲間ができて。で、あいかわらず、私は、友達と、「おい、大阪の梅田にシネマスコープちゅうのができたらしいぞ。ヨシッ、行こうか」「映画だけじゃつまらんけん、大阪球場、西鉄と南海があるけん、それも観に行こう」「天王寺〔動物園〕に、どうもゴリラが来たらしいぞ。それも行こう」と。映画、野球場、天王寺公園のゴリラ、観てな。帰りがけ、おたがいに笑うんですよ。もう、おっかしくて、おっかしくて。なんで、おっかしいかというたらね、そのゴリラの飼育員が、よりいっそうゴリラの顔をしてた(笑)。〔日帰りじゃ無理だから〕一泊、大阪の難波の、野球場の近くの旅館に泊まって。ナイターでしたからね。

〔そもそも、遊びに行くのに、島をどうやって出たのか、ですって?〕それがですたい。「チチ、キトク」だとか「ハハ、キトク」ですよ。「オバサンガシンダ」とか弔電を打つてもろうて行くわけですよ。

高2で初めての帰省

〔新良田にいた4年のあいだには、実家から〕誰も会いに来なかったです。

〔父が、私の高校進学に際しての社会復帰を認めなかった理由は〕あとでわかった。なんと、兄貴が発病して、高校1年で長島の高校に転校して来たんですよ。それはショックでしたね。8年ぐらい会ってなくて、はじめて会いましたね。〔父が私の早期の社会復帰を認めなかったのには〕それがあったんでしょうね。〔けっきょく〕兄も私も、一浪して、大学へ行って〔社会復帰を果たすんですが〕、二人とも再発するんですよ。私のほうが先だったですね、再発したのは。兄は、いまは外におります。実家を継いでます。

〔兄貴が新良田教室に転校してきたのは〕ものすごくショックでしたよね。兄貴が家を守るから、私は好きなことばっかすりゃいいんだと、楽な気持ちだったんですけどね。〔でも、再会しても〕兄弟であって、兄弟でないような感じですよ。この病気になる、親子の縁とか兄弟の縁というのが、ものすごく薄くなるんですよ。途切れちゃうんですよ。〔それが〕急に会うけん、もう、びっくりでしたねえ。

〔高校2年のときに、私は、はじめて実家に帰った。夏休みに〕兄貴がうちに帰るのなら、おれも帰れるんじゃないかと。だから、兄貴が病気になるまで〔長島に〕来なかったら、私はずっと帰ってなかったと思いますよ。

ところが、その帰り道がわからない。長い間ご無沙汰してるせいで、どこの駅で降りて行けばいいか、それがわからんわけですよ。大阪なんかは詳しいのに、肝心要の、自分の家に帰る道筋ちゅうのがわからない。悲しかったですね、それはね。

べつに、おれを迎えに来てくれるわけじゃないしねえ。そして、家へ帰って

も、私を歓迎してくれる人はいないだろうと思うしね。〔帰ったら、義理の母が〕おりましたね。当然ですよ、後妻さん来るのは。

〔家に帰っても〕居心地悪かったですね。あ、思い出しました。すぐ、恵楓園に遊びに来ましたよ。ここ、友達がいっぱいおりましたからね。田舎には、私は友達1人もいませんから。父も7人きょうだい、母も7人きょうだいで、〔イトコは大勢いるんですが〕まったく関係ないでしょ。もう、社会の横のつながりがありませんわ。行くところ、ない。結果的に、恵楓園に遊びに来てましたね。

本名で過ごした新良田教室、野球部の東北遠征

新良田教室（あそこ）は、みんな、本名〔で過ごしました〕。卒業証書は、本名を書かずにいかにからですね。

いちばんの思い出は、野球部の東北遠征。みんなを連れて、東北へ遠征に行ったんですわ。私はショートで3番でしたね。駿河〔療養所〕、多磨〔全生園〕、栗生楽泉園、東北新生園、松丘保養園。5つの療養所の患者チームと職員チーム、野球の試合に行ったんです。1ヵ月かけて。2年の夏休み。そのとき、ユニフォーム、おれにまかせろ、つって、熊本のスポーツ店で作ったんですよ。〔店の主人が〕なんで、高校生がユニフォーム作るかちってから、信用せんわけですよ。パーンと5万円払って、作ってもらった。

5つの療養所、1ヵ月間かけて。青春切符、1ヵ月間、通用するじゃないですか。とにかく、園内におったんじゃない、試合があまりできないわけですよ。外に打って出ないと、強い相手がいないわけですから。

〔愛生園から〕いっぺんに出られんわけですよ。それで、「岡山駅で集合！」いうてね。〔みんな、それぞれ〕工夫して〔園から〕出てくるんですよ。ゴソゴソゴソ。バットとグローブを持ってね。そういう実行力、あったですね。

〔一緒に野球をした〕Hさんは、北朝鮮に行きましたね。北朝鮮でお医者さんになってます。いま、北朝鮮のハンセン病療養所を巡回する医者です。H君の姉さんが北九州において、〔のちに、その姉さんを通じて〕北朝鮮では治らい薬が十分にはないから送ってほしいって、高校の同窓生だった私に相談があった。「ヨシッ、まかせとけ、いうて、薬を集めて、社会党の国会議員に託して、北朝鮮へ〔持って行ってもらいました〕」。

田中文雄と森田竹次

〔新良田では〕高校生が一般寮に行って、食事のお世話になるんですよ。私は、そういう時間がなかった。野球しよって、洗濯して、風呂へ入って、勉強しよったら、夫婦寮に行く時間なんかありませんよ。食べ物がないから、ひとが残したやつをね、フライパンで焼き飯にして食べてましたね。女の子〔と付き合う〕時間もなかったですね。

〔当時の長島愛生園の〕自治会長は田中文雄さんでした。田中さんは社会復帰して、ダイキンに入った。エアコンの会社ですわ。そこの重役になった。そしてやったのは、いまの〔東日本大〕地震で有名な、釜石から宮古、気仙沼、あそのマグロの遠洋漁業にダイキンの冷却装置をぜんぶ入れたんです。そして、〔宮城県の〕唐桑町の町長選挙にも出た。その人、昭和54年に仙台のデパートの屋上から投身自殺されたんですが、〔のちに〕『失われた歳月（上下）』

(皓星社, 2005年)が出たんですよ。すごいですよ。それをみれば、当時の療養所のこと、すべてわかります。

〔この田中文雄さんから、みんな影響を〕受けました。「とにかく、勉強しろ」いうてね。じっさい、1期生で、T君ちゅうのがおって、勉強して、なんと、阪大の医学部に合格しました。いまは、医学部の教授をやってます。

〔それと、あの頃は〕森田竹次さん〔の「山鳥学校」というのがあって。日本共産党の〕愛生細胞。あれもすごかった。友達、けっこう行ってましたけど。私は、とにかく、行く暇なかったですね。

お茶大出の女先生

私は大学を受験するんで、受験の雑誌、『蛍雪時代』だとか『百万人の英語』を買ってきてくれるように先生に頼むんですよ。で、お金を渡すと、百円札を消毒液にビラーっと浸けて、ガラスにペタッと貼り付けるんですよ、目の前で。

〔夕方〕4時か5時頃になると、それが乾燥して、ヒラヒラヒラァと校庭に〔舞ってる〕。「誰が拾(ひら)うか、って思いましたよね。おれはもう渡したんだから、なくなろうとおれの知ったことじゃない。わざわざ拾って、「先生、これ、落ちとったよ」と持っていく気はない。

あそこ、シャワー室があったんですよ。先生たち専用のシャワー室。先生は、みんな、長靴でね。クレゾール液に手を浸して消毒して。シャワーを浴びて、白衣から私服に着替えて〔帰宅するんですよ〕。おれら野球部だったから、先生が帰ったあとにね、「ヨッシャ。おい、先生たちのシャワー室に行くぞ！」ちってから、シャワー浴びて、なに知らん顔してましたよ

〔先生たちは〕自分専用のチョーク箱を持って、教室に来るんですよ。チョークを、ポトンと落としたら、いっさい拾わない。ポキーンと折れても拾わない。われわれはそれを拾って、使ってました。やっぱり、嫌われてるちゅうか、差別されてるという感じだったね。

だから、「この人が恩師です、という先生、1人もおらんですよ。小学校、中学校、高校、恩師という人はいませんでしたねえ。

ただ、I先生。その人は東京農大を出て、生物とか体育とか教えてくれました。ソフトボールやらバレーボールやらラグビーやら、一緒にやりましたよ。同じグローブとかバットで。仲良かったですね。

〔お札を窓ガラスにペチャッと貼ったのは〕U先生。でも、この先生はお茶の水〔女子大〕の国文科を出とるけん、この人の古文とか漢文は、見事なもんでした。いやあ、さすが、お茶の水だと。一生懸命勉強して、漢文はずっと百点を取りましたよ。先生の期待を裏切ったらいかんちゅう気持ちもあってですね。その先生の家は岡山の電器屋さんで、〔新良田教室には〕20年以上いましたね。卓球なんかも一緒にしよったですよ。

1 浪して学習院大学へ

3年のときには、〔先輩の〕森元美代治さんが慶応に受かって、高校の寄宿舎に喜んで報告に来ました。2月頃でした。寒い日。「太田君、慶応通ったぞ」と。「先輩、よかったね!」「ヨシッ、森元に続け!」ですよ。早稲田とか法政へ行ったやつもいましたよ。

〔新良田教室は、昼間定時制高校で〕4年制でしょ。愛生園は、19歳で成人

式やってくれました。アルバムをもらいましたね。

〔新良田教室卒業で〕私は長島愛生園から退園しました。〔退園といっても〕「軽快退所」〔の証明書〕をもらったわけでもなく、ただ園長が「あんたは、これから大学に進学するから、頑張れよ」という感じ。

〔新良田教室の定時制4年を終える年に〕学習院と慶応を受けたんですけど、2つとも落ちちゃって。一浪して、福岡の全寮制の予備校に行きました。そこで1年間勉強した。やっぱり、英語が遅れてました。そして、受験勉強用の勉強をしてなかったんですよ。受験テクニックがわからなかった。くる日もくる日も、問題集ですわ。そしたら、問題集、ぜんぶ頭の中へ入っちゃって。2年目は、同志社と学習院に通りました。

会社勤め、再発

私は東京へ行きたかったから、学習院に行った。〔就活では〕朝日新聞もTBSも受けましたよ。見事に落ちましてね。あとでゼミの先生から「なんで、おれに言わなかったんか？」言われて。〔私は、就職に際してゼミの先生の推薦状をもらおうという〕そういう術を知らなかった。しょうがない。これから成長する産業は何かって考えて、スーパー、印刷業、アパレル、けっこう受けました。当時、東証一部に昇格したばかりの大手アパレル会社への入社を選んだ。営業一部が東京の百貨店〔担当〕、営業三部は地方百貨店〔担当〕。私は自分から営業三部を希望して、福岡支店に行ったんですよ。福岡の岩田屋さんとか、玉屋さんとか、井筒屋さんとか、大丸さんを担当してですね。もう順風満帆でしたね。最高に面白かったですね。ほんと順調で、楽しくてしょうがなかった。自分で働いてお金を稼ぐちゅうの、最高でしたよね。

しかし、社会復帰できてたのは10年間ぐらいでしたね。ハンセン病は、これは不思議なんですけど、らい菌がゼロになっても、麻痺だけは残るんですよ。その麻痺が、〔体内に〕らい菌がいなくても、加齢とともに拡大するんですよ。それがこの病気の、ややこしいところですよ。

〔社会復帰して〕結婚したいと思ってましたけど、子どもをつくる考えは、あんまりなかったですね。やっぱり、怖かったですね。自分の母がいないでしょ。普通だったら、自分の母親に面倒みてもらえとかあるでしょ。私は〔実家から〕学費とか、金銭的なことは援助してもらいましたよ。でも、それ以外のことは、いっさい、家に依存することはなかったですから。なんていうんですかね、依存するような立場じゃない。ハンセン病の患者になったことで、家族とか家からまったく切り離された存在になったですねえ。みんな、それ、あると思うんですよ。家族的にも、親族的にも、完全に絆が断ち切られるんですよ。

〔私は社会復帰したときは〕病気は完全に治ったと思ってた。ところが、あとで知ったことですが、プロミンでは、菌を百パーセント殺してないんですよ。プロミンはらい菌を眠らせてただけ。殺してなかった。いまの、リファンピシンちゅうのは、らい菌を殺すんですけど。プロミンちゅうのは、菌をただ眠らせてとだけなんですよ。プロミンで治った人の30パーセントは、再発するんですよ。再発率30パーセント。

私は、子どものときから患者さんを見てましたから、重症になったら、手が曲がったり、顔が変形したり、最悪の場合は目が見えなくなるぞと、それ知っ

てました。たとえ再発しても、最悪の状況だけは避けたいと。生活の質だけは落とさないように、後遺症が出ないように出ないように、という意識はずうっともってましたね。

じつは、私は、恵楓園に入所していて、高校から大阪に社会復帰した女性と付き合っていました。〔まだ大学生のときでしたけど〕昭和39年、新幹線ができて、そのとき東京から大阪まで5,000円でしたよ。新幹線で東京から大阪にデート、行っていました。年に何回か。

会社員になって、彼女といよいよ結婚しようと思って、一緒に住み始めたんですよ、福岡で。一緒に暮らし始めたとたんに、再発しちゃったんですよ。勤めて3年目でしたね。2年で仕事を覚えたし、いよいよ結婚、と思ったとたんに、再発でしょう。そのとき初めて男泣きしましたよ。

再発したら、とにかく眠くてね。福岡支店におったから、会社から西鉄線で帰るときに、駅をよく寝過ごしました。それと階段が登れませんでした。「あ、これは、いよいよきたぞ」と。子どものときに発病したときとおなじような感じなんです。とにかくからだ重い。とくに足が重いんですよ。地下鉄なんかの階段、フーフーやりました。それで、「あ、これは来たぞ、来たぞ」と思いましたよ。早く療養所へ行って治療して、また頑張ろうと思いました。

眉毛は、前はものすごく濃かったんですよ。私、ここに再入所しようと思ったのは、やっぱり、眉毛が薄くなったからですよ。飲み屋に行くのですね、飲み屋のねえちゃんが「また薄くなった、また薄くなった」って言うわけですよ。洗面所で顔を洗うと、眉毛がパァッと落ちちゃう。これはいかんと思ってね。この顔は、なんとしてでも守らにやいかんと思って。給料の60パーセントの休職手当をもらいながら、1年間、会社を休ませてもらった。それをもらいに行くの、辛かったですねえ。仕事してないのに、カネもらうわけですからね。

それがまた、「らい病」とか「ハンセン病」と書かれたら困るから、「多発性神経炎って書いてください」言うて、診断書ももらって。でも、「おまえは、見たら、どうもないじゃないか」「別の会社に転職したのではないか」と、そればかり言うんです。「ちがう、ちがう」。もう、ほんとのことを言えないわけですよ。もう苦しかった、苦しかった。会社へ入るのも難しいけど、辞めるのもまた難しい。

昭和47年、再入所

再入所しようと思ったのが〔昭和〕46年だったんだけど、療舎（へや）が空いてなくて、入れなかった。入れたのは〔昭和〕47年。

昭和46年頃からは、リファンピシンだとかいろんな特効薬があったですね。これを半年飲めば無菌状態になるの知ってました。ところが、リファンピシンの副作用で、目は充血するわ、熱は40度ぐらい出るわ。もう1ヵ月か2ヵ月、トイレには這っていきよったですね。目は充血して、兎眼（とがん）いうて、目が兎の目みたいになったですね。それが治った薬が、あれでした、サリドマイド。妊婦の人が飲んで、奇形児が生まれた薬ですが、〔ハンセン病治療の副作用には〕効くんですよ。〔先生は〕熊丸茂先生でした。あの先生とサリドマイドのおかげで、私は盲人にならなくてすんだですね。

でも、その副作用で1年じゃ治らなくて。〔けっきょく〕1年後に、彼女も療養所に入ってきたんですよ。彼女のお母さんが恵楓園（ここ）におって、ちよ

っと不自由だったから、お母さんの面倒をみるということもあってね。

彼女には、世話になりましたね。お母さんにもね。そういうことで、ある意味、綱渡りの人生ですよ、ぼくの人生ちゅうのは。すぐ、はね返されちゃうんですよ、このハンセン病で。

ハンセン病になった人たちは、当たり前に、普通に生活するというのが、破壊される。病気に付きまとう医学的、社会的、いろんなのが複雑に絡み合って、当たり前な、平凡な生活ちゅうのが、なかなか築きにくい。そこで、自分たちなりの形ちゅうのを作っていくしかないですよ。

私たちは、正式に籍を入れたけど、ずっと別々に暮らしてる。彼女は、お母さんの面倒をみるために、お母さんと一緒に暮らしたんですね。それはもう、暮らし方は、自分たちで考えていかんしょうがない。

再入所して、私が完全に無菌状態になるのに、10年かかりました。それでも、また私は〔外に〕出ようと思っただんですが、「どうしても、自治会の役員をやってくれ」と頼まれて、昭和58年からいまで、ずっと自治会の役員をしてきたんですよ。

その前に9年間、〔園内の〕印刷所におりました。〔自治会の機関誌の〕『菊池野』とか、名刺、献立表、俳句とか歌集を印刷してました。〔仕事仲間は〕10人ぐらいおったんですが、最後、2人になりましたね。私は、その最後の一人でした。印刷所が閉鎖になって、私は自治会のほうに引っ張られたんですね。

私は、自治会長は3期6年間。平成11年から平成17年までかな。その前、6年間は副会長でした。わたしが副会長をしているときの会長は、河岸渉（かし・わたる）さんでした。この人は14年間、会長やりましたからね。平成8年の「らい予防法」の廃止のときの会長ですね。そのとき、わたしは〔恵楓園自治会の〕副会長のまま、東京の全患協の事務局へ中央執行委員で行ってました。

「らい予防法」廃止

そのときの全患協の会長は〔大島青松園の〕曾我野一美さん、事務局長が〔長島愛生園の〕高瀬重二郎さんでしたね。〔当時、「らい予防法」という法律をなくすのに反対の声が、全患協のなかに〕けっこうありましたね。既得権がなくなる、と。だから、既得権がなくならないように、付帯決議を国会でもらいました。1つは、強制退所をさせない。2つ目が、患者給与金の保障。3番目が、再入所を認める。この3つの既得権は確保しました。

療養所も存続するように、「らい予防法の廃止に関する法律」という、まあ、珍しい法律でしょ。“法律を廃止する法律、”というのは、10本ぐらいしかないですよ。

私なんか、そのとき恵楓園の副会長で、「らい予防法改正特別委員会」の委員長だったもんですから、「ハンセン病基本法」だとか「ハンセン病補償法」とか、そういう法律をつくるちゅう案を出した。いま、弁護士さんが言ってるような「ハンセン病問題基本法」と同じような名称を、「らい予防法」廃止のときから私は言ってたんですよ。でも、それをやるのはひじょうに難しいと。厚生省の役人から言わせれば、「それだと、大蔵省がオーケー言わない。予算が確保しにくい。『らい予防法』ちゅう名前が付いてないと、大蔵省に予算を削られる」と。そして「療養所も再編成されるかもわからんぞ」と。で、既得権を守るためには、「らい予防法の廃止に関する法律」ということで吞むんで

すけどね。われわれの〔要求する〕付帯決議を認めさせるために、高瀬会長と神美知宏（こう・みちひろ）事務局長と中執の私の三人で、厚生省や議員会館めぐりをしましたね。

国賠訴訟

平成9年、恵楓園（うち）で〔全療協の〕支部長会議を開いたとき、星塚〔敬愛園〕の作家の島比呂志、あの方が妙な動きをしようと。あの方が、らい予防法廃止のとき、「少なくとも300万ないし500万円の慰謝料を国家からもらうべきだ。全療協は何やってんだ」と。「隔離の被害を受けたのだから、当然、予防法廃止と同時に、金銭的な補償をすべきだ」と言い始めたわけです。

その翌年、平成10年の5月に、西日本新聞が一面でスクープしたんですよ。「ハンセン病患者、裁判提訴へ」。鹿児島〔の星塚敬愛園の入所者たち〕が、どうも裁判を決意したと。すぐ東京の全療協〔本部〕に知らせた。ちょうど、多磨〔全生園〕では、曾我野さんはじめ全療協が厚生省に予算の陳情、交渉をやっている最中だった。ファックスを送ったら、「なんだ、こりゃあ！」って、曾我野さんも驚いたそうです。

〔まだその時点では〕原告〔になる人〕は5人か6人。これは事態を静観しよう。〔けっきょく〕星塚が9人、恵楓園が志村康さんが4人集めて、第一次原告13人で提訴した。それが〔平成10年〕7月の31日でした。国家賠償金を〔一人〕1億円要求する、と。

われわれ全療協としては、予防法廃止のとき、全療協として隔離政策による損失の補償を求めるといふことと、「国に対して個人の立場で金銭の要求はない」ということを決めとったんですよ。これは全療協の支部長会議で決まった事項です。そうしないと、それぞれ事情が違う、入所の経緯も違うし、大変なことになると。自治会も分裂してしまう、全療協も分裂しちゃう、と。最終的に被害をこうむるのは、不自由な人がいちばん困るんだと。厚生省は馬鹿じゃないから、予算を削減したり職員数を削減したりの攻撃をしてくる。どんどん合理化対策を取ってくると思うとったもんですからね。

〔それもあって、訴訟に対しては〕静観、静観で、ずっとやってきたんですよ。〔しかし〕私は熊本におるから、マスコミやら裁判の情報がぼんぼんぼんぼん入ってくる。「全療協、このままじゃダメだ。バスに乗り遅れとる」と。平成13年の4月に、青森の松丘保養園で支部長会議をやった。そのときに、この裁判をどうするかという特別委員会の委員長が、長島の石田〔雅男〕さん。副委員長は私だった。とにかく、全療協の〔裁判〕支援の決議文の案をつくらにゃいかんということで、石田さんと私で作ったんですよ。

原告団、弁護団の〔熊本〕県立劇場の集会、2,000人集まりましたからね。これはもう、ハンセン病訴訟は、人権運動で市民権を得ると。遅れてるのは全療協だけだ、と。バスに乗り遅れたら、もう末代の恥になるぞ、と。石田さんに「これ、入れろ」と言っても、「いや、これ書いたら、もう長島愛生園に帰れん」と。「いや、帰れんじゃない。このまま静観とか、支援とかいうんじゃ、ダメだ」って石田さんを説得したんですよ。「全療協も一緒に行動をとるにして、全面勝訴にむけて最大限の努力をする、という文言を入れにゃダメだ」と言って、そう書いた。それには、〔全療協事務局長の〕神さんも、びっくり、たまがって、「これは、本部よりも先へ行ってるぞ」「ヨシ、これで行こう」と。

それでやっとまとまった。

そのときまだ、ぶつぶつ言ったのが、駿河〔療養所〕の西村〔時夫〕さんと、星塚〔敬愛園〕の山村一郎さん（園名）。あの二人は強固な反対だったんですよ。でも、5月11日、勝訴の判決が出たら、二人の態度はコロッと変わっちゃった。「万歳！」をして、原告団の代表みたいに〔ふるまいだす〕。びっくりしましたねえ。

「らい予防法」廃止のときも、そうですよ。駿河と星塚と、もう一つ、久保〔瑛二〕さんの東北新生園。3つの支部が「らい予防法」廃止に反対だったんですよ。だから、〔あのときは〕10の支部長〔だけ〕が厚生省に行ったんですよ。

〔平成13年5月11日、熊本地裁の判決の日、法廷の傍聴席には〕65人しか入れなかったんですけど、私は全療協の非常勤中執だから、弁護団から〔傍聴券を〕もらえた。〔ついでに〕運試しやけんと思って、籤を引いたら当たって、〔傍聴券〕2枚になっちゃって。1枚は〔恵楓園自治会の〕中修一君にやりましたよ。

〔あのときは〕全面勝訴かどうかはわからんけども、絶対、勝つのは間違いないと思ってました。〔ところが、杉本正士裁判長が異動になって〕裁判長が変わったもんだけん、たどたどしい。ひっかかりひっかかり読む。聞いているほうは、30分ぐらいしても〔結論が〕わからんわけですよ。テレビ局のRKKが、途中、間違っ、「原告が負けた」と、逆のことを流しちゃって、大変でしたよ。私は〔傍聴席で〕一生懸命筆記してましたね。

〔で、勝訴判決となって〕私は東京へ行った。〔控訴を阻止して〕判決を確定せにゃいかん。そのためには原告を増やすしかない。私も、厚労省前で拡声器を持って〔街宣車の〕上に乗って演説ですよ。そして、国会議員会館に詰めてですね、ずうっと2週間、やってみました。厚労省前座り込み、首相官邸前の座り込み、やりました。あの頃、やっと携帯電話が出てきたとき。携帯電話、ちょっと大きかったですね。持ったの、私だけでした。だから、私は、その都度、リアルタイムで菊池支部に連絡してました。

私は〔平成〕11年の3月から〔菊池恵楓園の自治会長になりました〕。私の前の〔自治会長の〕河岸さんは〔裁判には〕反対だったんです。河岸さんが自治会長のときは、厳しかったです。〔裁判の支援者とか弁護士には、園内の集会室は〕貸さない。〔面会人宿泊所には〕泊まらせない。鹿児島〔の星塚敬愛園〕とうちは、そうでした。

〔そもそも〕由布雅夫園長が、マスコミの取材制限をしたんです。園の管理運営上、ハンセン病訴訟については、マスコミの取材をいっさいお断りする、と。自治会長だった河岸さんは、それに同調したんですよ。で、私が平成11年〔3月〕に〔自治会長になって〕それをガラッと変えたんですよ。由布先生のあの姿勢については、私も疑問をもってたから。

でも、こういうことがあったんですよ。裁判をすることについて、弁護団から事前に、自治会にも、全療協にも、挨拶がいっさいなかった。まあ、はっきり言えば、袖にされた。自治会、全療協、まったく相手にされなかった。無視された。それに対する反感があったんですよ。「冗談じゃない」と。ここまで療養所を誰が作ってきたと思うんか、と。全療協であり、自治会だぞ、と。患者運動によって、ここまで療養所はきたんだ。昭和28年の「らい予防法」〔闘

争] のとき、弁護士は何をやってたんだ。支援してくれたのは、ほんの一部の国会議員だけじゃなかったか、と。

やはり、自治会なり全療協に事前に説明して、こうこうこういうことで裁判をやりたいんだと、ちゃんと筋を通してくれればよかったけど、それ、まったくなし。だから、私は東京で、はっきり言ったの。「弁護団のゲリラ闘争によって、この裁判の突破口が開かれた。この裁判、起こしてもいい。裁判権は誰もが保障されてる。しかし、この裁判によって、誰一人として被害者を出してはならない」。原告も、原告じゃない人も、園の職員も幹部も、この裁判によって、誰一人として犠牲者を出さないちゅうのが、私の信条だったんですよ。私は、そういうスタンスで、この裁判に臨んだわけですよ。最終的には、由布園長が犠牲者になりましたけどね。

[控訴阻止の後] いちばん大事だったのは、原告じゃない人に対して、補償金を確保することですよ。それは、大変でしたねえ。[でも] あるとき、自民党の幹事長の野中広務さんと実力者の橋本龍太郎、それから、厚労大臣の坂口力さんが国会で動いてくれて、政治判断で賠償金と同額の補償をするということになりましたね。[それが通って、園内が落ち着きました。]

宿泊拒否事件

平成 15 年の 9 月に、熊本地裁での法廷闘争が終わりました。すべてのハンセン病 [裁判] が全面和解 [の道筋がついた]。ああ、やれやれと思ったとたんに、11 月に、黒川温泉 [での宿泊拒否] 問題が、突如として起きました。

[わたしも熊本県出身ですから、そのときの里帰り事業のメンバーに] 最初はなっていましたけど。もう忙しくて [里帰りメンバーから外れていたんですよ]。で、11 月の 15 日だったか、県の課長と担当の者が 3 人で来て、「今年の里帰り事業は中止します」と。「なんで中止?」「黒川温泉の宿泊が拒否されて、なかなか他のホテルの手当ができないけん」。「冗談じゃない」と。「ホテルも取れんのか。予約できんのか」って、すったもんだして。「とにかく、中止はまかりならん。ほかの場所でもいいから、ほかのホテルを取って、同じ日程、11 月 18 日に実施してほしい」ということでやったんですよ。

で、いろいろあったなかで、日程 [表] を見たら、11 月の 17 日が、たまたま昼から日程が空いとったから、「ヨシッ、自治会の役員とホテルに、事実関係を確認に行こう」と。私たちだけで行ったらいかんけんと思って、[自治会] 役員 5 人と、恵楓園の福祉課長と、県の阿蘇事務所の人を同伴して、ホテルに乗り込んだわけですよ。そしたらもう、にっちもさっちもいかんわけですよ。のりくらりやられてですね。で、[さしたる成果なしに] 帰ってきて。

この問題は、私は、とにかく、予定通り 11 月 18 日、今年の里帰り事業を [滞りなく] 実施することが先だったんですよ。と思うてたんだけど、17 日の夜の 7 時頃、潮谷 [義子] 県知事から私の自室 (じたく) に電話がかかってきて。「太田さん、もう、この宿泊拒否は県庁で知らんもんはおらん。で、もう、事実関係を発表したいんだけど」って言うから、「ちょっと待ってくれ。知事、これ、発表したら、大変なことになりますよ」と。「だいいち、黒川温泉は熊本県の観光のドル箱だし、社会的影響は計り知れん。私はべつに黒川温泉が憎いわけでもなんでもないし。とにかく、里帰り事業 (これ) 終わってから、ちょっと時間をおいてから、この問題に対応しましょう」と言ったが、「いや、ダ

メだ。明日 18 日、〔定例の〕記者会見が入っている。黒川温泉のホテル名を言わないと、黒川温泉全体にも迷惑がかかる。〔どうしても〕発表する」って言われましてね。まあ、このあいだ、知事の話では、「あのとき、太田さんにこの話をしたら、太田さんは喜んでくれると思うとった」って。「それは違うでしょ。私は、患者の立場ですよ。知事は知事という大きな社会的地位あるけど、立場が違うんですよ」。で、平成 10 年に、おんなじような事件が大島青松園で起きてるんですよ。だから、私は、もう、大変なことになるってことも知ってましたから。

私は、もちろんこの問題を黙っておくことはしません。〔里帰り事業を〕実行したあとに、ちゃんと解決する、問題にするつもりだったんです。でも、とにかく、もう、知事が〔記者会見で〕発表したあと、その晩に 50 件ぐらい、誹謗中傷の電話がかかりっぱなしでしたね¹。〔さらに〕知事が記者会見で、「あとは、菊池〔恵楓園〕の太田〔自治会長〕さんに委ねます²」²というようなことを言われたんで、もう、マスコミが大挙して自治会に来たわけですよ。〔11 月 20 日には〕ホテルも謝罪に来るということになった。

〔ホテルの総支配人の〕謝罪、が、11 月 17 日にホテルを訪ねたときの説明とは違って、総支配人個人の問題にすり替えたものだったので、謝罪文の受け取りを拒否したところ、その場がテレビで全国放送されて、その結果、私たちは〕すごいバッシングを受けましてね。想像以上のバッシングを受けた。

〔ホテル側は〕ホンネとタテマエ〔の使い分け〕ですよ。ホテル側は、とにかく患者さんを怒らせたらずいということで、〔恵楓園の〕患者さん全員にお節料理を配る。温泉旅行〔への招待〕を計画する。次から次へ、むこうから来るわけですよ、われわれをなだめに。ところが、県と対峙するときはまったく、県と対立するわけですよ。だから、「社長、いまから一緒に県庁へ行きましょう。あんたが県に謝罪すればすむことだから」。それは「絶対、行かない」って言うんですよ。「あくまで県が悪い」と言い張ってですね。もう、〔われわれは〕官と民とのあいだに挟まれてしましましてね。で、〔社会から差別の〕攻撃を受けるとは、われわれでしょ。

〔その社長というのは〕それまでの広報部長。ほんとの社長は雲隠れしちゃって、広報部長が社長に昇格。その江口〔忠雄〕さんというのが、全国〔の療養所を〕行脚したんですよ。アポイントをとらんで、勝手に全国〔の療養所を〕回ったりしてですね。

〔とにかく〕県庁とホテル側との対立の中に、放り出されましたねえ。われわれは、自分が置かれている立場ちゅうの、こんなに弱いもんかなちゅう感じでしたよ。〔われわれが〕怒れば怒るほど、社会からのバッシング、強くなるんですよ。こっちは怒るに怒られんわけですよ。

¹ 熊本日日新聞（2004.11.14）の「宿泊拒否事件⑥／苦渋の決断（上）」には、「宿泊拒否事件が記者会見で公表された昨年 11 月 18 日。その直後から、菊池恵楓園の自治会には激励と、ホテルの人権意識の低さを嘆く声が電話で多数寄せられた」とあり、ここでの太田さんの語りの「その晩に 50 件ぐらい、誹謗中傷の電話がかかりっぱなしでしたね」とでは齟齬があるが、ご本人に確かめたところ、「当時の職員からの報告だった」とのことである。

² この知事の発言の趣旨は、「菊池恵楓園の入所者への取材は、自治会長の太田明さんを窓口にしてほしい」ということであつたと思う。

[平成 16 年の 4 月には、高遠菜穂子さんという人がイラクで武装勢力の人質になるという事件が起きた。]あれも、自己責任問題。バッシングがあった。[われわれと]おんなじでしたね。おんなじ流れでしたね。われわれは被害者のつもりが、いつのまにか、加害者になっているんですよ。

ホテル[側]は、次から次へ手をうつでしょ。ホテルは閉鎖する。従業員は首を切る。ホテルの従業員たちは[全日本建設交運一般労働組合(建交労)の分会を結成して、解雇無効の]裁判するわけでしょう。われわれも一緒に裁判に加わって、頑張れと、ともに闘ったわけですよ。3年間、それにかかりました。このあいだ、2月に[分会長として裁判闘争を闘った永野弘行さんが]来られて、講演してもらいました。そのとき、しみじみ言ってくれましたね。ホテルの従業員たちが「そこではじめて目覚めた」と。[恵楓園の]自治会からカンパを頂く、裁判闘争も支援してくれるということで、ホテルの人たち、はじめて、そこで目覚めたんですよ。で、自治会もそれを支援しとったんですよ。ホテルの人たちは、われわれを受け入れるために、部屋割りまでしとったんですよ。それを知とったもんですから。従業員はわれわれを受け入れてくれる。受け入れてくれないのは、本社の社長なんですよ。

[ホテルの総支配人は、恵楓園に「謝罪」に来たとき]「最終的には自分の判断で」って言うたけど、それはウソだと思う。本社の命令で動いただけの話ですよ。岡山の人で、おばあちゃんが長島愛生園のことをよく話していた、と。「怖いもんだ」っていう偏見はあったみたいですね、ハンセン病に対して。

[けっきょく、あのホテルは]潰れて、いまは更地になってます。[従業員たちは]解雇されました。裁判には勝ちました[けどね]。賠償金、[一人]300万[円]ぐらいでしたかね。お金も取れました。でも、働く場がなくなりました。それ、いちばん心を痛めたですね。従業員の人たちに皺寄せ[が行った]。

でも、結果的には、法務省も動いてくれたし、文科省も学校教育に[力を入れてくれた]。ひじょうに啓発効果はあがりましたね。私自身も、大きな社会勉強をさしてもらったし。おかげで、法務省の人権擁護局長も来てくれるし。法務省あげてね、地方法務局も本省も、この啓発に本腰になってくれました。啓発活動が、より進展しました。それから、施設訪問が、年間300団体ぐらい、2万人ぐらい[恵楓園に]来ることになりましたね。いまも、ずうっと続いています。

私も黒川温泉問題をテーマに、いろんなとこに講演に行くようになりました。私、いま、熊本大学と熊本学園大学の非常勤講師をやってるんですよ。この事件が起きてからですよ。黒川温泉問題を通じて、ハンセン病問題と人権問題を考えるということですよ。

検証会議に資料提供

[宿泊拒否事件が起きたときには、「ハンセン病問題に関する検証会議」が始まってましたね。平成 16 年 6 月に検証会議が恵楓園で開かれるというので]私は検証の裏付けになる資料の収集ですよ。[旧]事務本館[に眠っている]公文書をいかに出させるか。当時私は自治会長だったから[旧事務本館に]入っていったんですよ。で、片っ端からコピーした。無癩県運動にしる、いろんな問題の裏付けですね。さっき言った解剖承諾書なんか、私が見つけたんですよ。[恵楓園で開かれた]検証会議では、その現物を恵楓会館に並べたんですよ。

よ。〔あれ、「解剖承諾書」じゃなくて「解剖願」でしたね。〕こちらから、願
い奉る。

実家、親戚との関係

いまは、1年に2,3回、家へ帰りますけどね。墓参りは、自分の車で行きます。あの黒川温泉〔問題〕で、私は連日、テレビに出たんですよ。新聞にも出た。そしたら、母方のイトコとの関係ができちゃった、いい方向に。母方のイトコとは、まったく会うたこともなかったのに、何回か一緒に食事をしたり、ここにも来てくれるようになりましたね。これは不思議でしたね。

また、プロ野球の馬原〔孝浩〕選手と仲良くなったこと。ほんと、黒川温泉〔問題〕がなかったら、馬原君との関係もなかったですね。彼は入団する前に、30万円〔恵楓園自治会に〕寄付してくれたんですよ。で、私も意気に感じて、恵楓園の公会堂で入団激励会をやったんですよ。それからずうっと、毎年、1月のキャンプのときに、熊本ホテルキャッスルで、何百人と集まって激励会が開かれるんですが、私はファン代表として挨拶してもらってる。

将来構想問題

国立のハンセン病療養所、13カ所あるわけでしょ。いま入所者が、全国で2,300人ぐらいしかいない。あと5年すると1,000人を切りますよ³。10年後は500人ぐらいですよ。青森から沖縄まで全国13園にハンセン病の元患者さんが500人で、ほんとにハンセン病療養所として存続できるんだろうか。そこに、30人、50人、残った人が、医療や福祉やら介護やら、百パーセント満足できる状態か。私はひじょうにむづかしいと思うんですよ。やっぱり、13の療養所を集約する、再編成する時代が来るんじゃないだろうか。4カ所ぐらいに再編成してもらったほうが、かえって、いままでどおりの医療、福祉、生活の水準を維持できるんじゃないか。だとしたら、全療協なり自治会が発言力をもっとるあいだに、われわれのほうから療養所の再編成を〔提案したらどうかと思う〕。

いまは、13園が、同時並行で〔バラバラに〕将来構想やってるけども、入所者は減っていく、新発患者はいない、ということになると、全療協の組織、自治会の組織の力も、だんだんだんだん低下してくる。そのなかで、われわれの生活がほんとに保障できるかっていったら、ひじょうにサービスが低下するんじゃないか。われわれの医療、生活、福祉のいまの水準を維持するには、再編成ちゅうのも、一つの選択肢のうちに入るんじゃないかなと、私は思ってますよ。

いま、発言力の強いうちに、沖縄〔愛楽園〕、菊池〔恵楓園〕、長島〔愛生園〕、多磨〔全生園〕といった、わりと環境のいいところを、ガチッと抑えておいたほうがいいんじゃないか。そういう思いきった発想の転換も必要ではないか。

³ 2021年12月末現在で、全国13園の入所者数は1,000人を切り、955名。平均年齢87.3歳となった。入所者が100名を超えるのは、菊池恵楓園、多磨全生園、長島愛生園、沖縄愛楽園の4園。最も少ないのが奄美和光園の18名。語り手の太田明さんの予測よりはペースはゆっくりしているが、着実にハンセン病療養所入所者の人数は減少の一途を辿っている。なお、2022年9月15日現在で、菊池恵楓園の入所者数は145名（男性57名、女性88名）。

ここは、思いきって、こっちが先手を打って、離島や僻地の療養所は解消し、重点的な施設を残したほうがいいんじゃないか。

全療協の神（こう）事務局長は、「〔国は〕立ち枯れ〔政策〕、立ち枯れ〔政策を取っている〕」って〔批判してるけど〕、「立ち枯れ」は自分たちの責任じゃないの。13園〔ぜんぶ〕を残すことが、立ち枯れにつながる。〔このままでは〕最後は全療協の責任になっちゃう。

いま、恵楓園は、西地区に集まってきている。私は、5年以内にぜんぶ西のほうに集まっていたらこうと。そしたら、東地区が空きますから、そこに、500床ぐらいの老人センターを2つぐらい造ってもらえばいいな、と。ヨーロッパのノルウェーなんかのハンセン病療養所は、みな、老人ホームになってます。それはそうでしょ。老人施設のためのノウハウがすべてありますからね。介護職員もいるし、看護師さんもおるし。マンパワーの雇用にもつながると思います。

将来、療養所は福祉施設として存続し、発展的解消を計ることが理想ではないでしょうか。もちろん、ハンセン病療養所としての歴史的建造物は、永久に現地で保存してもらいたいです。

Giving Up Ordinary Life in Society Because of a Relapse: A Life Story of a Resident in Kikuchi Keifuen

Yasunori FUKUOKA and Ai KUROSACA

Akira Ota (his sanatorium name), an ex-patient of Hansen's disease, was born in 1943 to an old wealthy family in Kumamoto. His mother was also an ex-patient of the disease and forced into a divorce when he was only 4 years old. When he was in second grade of elementary school, he had symptoms and entered Kikuchi Keifuen, one of the national Hansen's disease sanatoriums in Japan. This paper is his life story. The interview was conducted by Yasunori Fukuoka, Ai Kurosaka and Kaori Adachi (an undergraduate student of Saitama University at the time) on March 18, 2011. Mr. Ota was 67 years old at the interview.

The title of this paper comes from the interviewee's narrative. After he graduated from Niirada School (a high school for residents of Hansen's disease sanatoriums), he started to live outside sanatoriums. In Niirada School some of the elder students succeeded in getting into college outside sanatoriums, and this fact encouraged him to try the college entrance examination. He entered and graduated from a prestigious university in Tokyo. He got a job at an apparel company and enjoyed his work. He was thinking of marrying a woman he lived with, who was also an ex-resident of Keifuen. However, at the end of his twenties, he had to reenter the sanatorium because of a relapse and the side effects of rifampicin.

In the sanatorium, he became an executive of the Association of Kikuchi Keifuen Residents in 1983. Later he became a member of the central executive committee of the All Japan-Association of Hansen's Disease Sanatorium Residents. He experienced many historical events while in these positions; the repeal of the Leprosy Prevention Law (1996), the decision of the Kumamoto District Court for Hansen's Disease Government Liability Lawsuit (2001), an incident of refusal to accommodate Keifuen residents by a hot spring hotel in Kumamoto (2003). At the present time the interviewee is the vice president of the Association of Kikuchi Keifuen Residents.

Keywords: Hansen's disease, segregation policy, Leprosy Prevention Law, life story